

専門部会委員による事業評価報告書

報告日：令和8年2月6日

報告者：宮崎 優也

令和7年度「つどい、つながる文化の会議」事業評価について

評価指標①：文化芸術を通じた交流の機会が充実している

■文化の会議を通じての参加者の行動等の変化

アンケート結果（4段階評価）を通年で見ると、文化芸術への関与意欲および新しい発見や好奇心の獲得は、初回から最終回まで比較的高い水準を維持している。初回では関与意欲が平均約 3.6 と高く、参加者の多くが当初から文化芸術に対して前向きな関心を持って参加していたことがうかがえる。その後、数値は回ごとに小さく揺れながらも、最終回でも約 3.3 程度を保っており、関心が大きく失われることはなかった。

より特徴的なのは、「新しい出会いやつながり」の項目である。初回では平均約 3.1 であったものが、中盤では約 3.7 まで上昇しており、参加者同士の関係性が時間をかけて育っていった様子が定量的にも確認できる。一方、「周囲に紹介したい」という外部波及を示す項目は、中盤で一度高まった後、後半では相対的に落ち着く傾向を示している。これは交流が弱まったというより、関係性が内側で深化する段階に入り、外へどう接続するかが参加者にとって見えにくくなった可能性を示唆している。

なお、本事業の設計上、本年度は外部発信や広範な波及を主たる成果指標には置かれておらず、参加者が安心して集い、対話し、関係性を深めること自体が重要な到達点とされていた。そのため、外部への紹介意向が後半で落ち着いたことは、必ずしも停滞や後退を意味するものではなく、むしろ内的な関係性の成熟段階に移行した結果として解釈することができる。

この傾向は、会議を通じて実際に観察された様子とも整合する。第2回時点では、各回冒頭の振り返りが参加者間の共通理解を形成するうえで有効に機能していた一方、「つどい・つながる・つたわる」という役割概念が、日常の行動としてはまだ具体化されておらず、議論が目的から逸れやすい兆しも見られた。こうした課題は回を重ねる中で完全に解消されたわけではないが、参加者同士の信頼関係が形成されるにつれ、「どこまで自由に話してよいのか」「何のために集まっているのか」という問いとして、より自覚的に共有されるようになった。

参加者インタビューでは、「茨木市内のイベントに自分から参加するようになった」「会議で知り合った人から別の活動に誘われた」といった具体的な行動変化が語られている。これらは、文化の会議が単なる対話の場にとどまらず、参加者の行動を市内の実践へ接続する起点として機能していたことを示している。また、受託者も、参加者が自らの関わっている活動について積極的に「つたえる」ようにな

り、情報の受発信が活性化していると評価している。

■文化の会議を通じた参加者同士や事務局との交流

参加者同士の交流は、会議内のグループワークにとどまらず、会議外での活動や別事業への参加へと発展した例が確認されている。受託者は、文化の会議以外の場でもつながりが広がり、参加者同士が一緒に活動に参加する関係性が生まれていたと述べている。これは、「新しい出会いやつながり」の評価が中盤で上昇した定量結果を、定性的に裏づけるものである。

また、事務局や受託者がディスカッションに入り発言と対話を促すことで、参加者が「この場では自分の思うことを言ってよい」と認識するようになった点は、交流を成立させる前提条件として重要である。一方で、関係性が成熟するにつれ、議論が文化芸術の枠を超えて市政全般や市民活動一般へ拡散する場面も増え、目的に沿った対話をどう維持するかという課題が顕在化した。

これは交流が不足しているからではなく、むしろ交流が十分に成立したからこそ表面化した論点であり、本会議が「安心して語れる場」として第一段階に到達しつつあることの裏返しと捉えることができる。

【コメント】

文化芸術を通じた交流の機会は、量・質ともに一定程度充実しており、参加者同士の関係性が会議外へも波及する段階に至った点は評価できる。一方で、交流が成熟したがゆえに、「その交流をどこへ接続するのか」「何をもって次の段階とするのか」という共通理解が不可欠となっている。交流の充実は本年度において概ね達成されており、次年度はその交流を外部波及や役割実感へと接続する設計が求められる。

評価指標②：だれもが文化芸術とつながる環境がつけられている

■参加者に市民 AC として活動してもらうためのはたらきかけ

アンケート結果からは、文化芸術への関与意欲や好奇心が高く維持されている一方で、「市民アートコーディネーターとしての理解が深まったか」という役割理解に関する項目では、最終回においても評価が相対的に控えめであった。肯定的回答は多数を占めるものの、「非常に理解した」と言い切る参加者は多くなく、理解がなお形成途上にあることが示唆される。

しかし、この結果は必ずしも否定的に捉えるべきではない。市民アートコーディネーターと専門職としてのアートコーディネーターは、上下関係や代替関係にあるのではなく、役割の異なる補完関係にある。本会議の目的は、あくまで「茨木市版の文化的コモンズの形成」にあり、イベントや企画の実施はそのための手段の一つに過ぎない。

本事業では、市民アートコーディネーターは「一定の役割を遂行する人材」として完成させることを目

的としておらず、「関わり方を模索し続ける存在」とされるべきである。

その観点から見ると、本年度は、市民アートコーディネーターが「完成した役割」として育成される段階ではなく、市民が安心して関わり方を模索し、「どのように関わるのが許されているのか」「自分はどの位置にいるのか」を問い続けられる第一段階に位置づけられる。参加者インタビューで語られた「越境できる人」「聞くことを大切に人」「裾野を広げる存在」といった市民 AC 像は、役割を一義的に定義するものではなく、それぞれの生活や関心から引き寄せて理解されている点に特徴がある。

受託者と参加者が整理する「自由なテンポで」「まざりあう」「やってみよう」というキーワードは、市民アートコーディネーターを即戦力として育てるのではなく、関わり方の裾野を広げる存在として支える姿勢を示しており、本年度の到達段階と整合的である。本評価で確認された役割理解の揺らぎは、こうした事業設計と矛盾するものではなく、むしろ意図されたプロセスの一部として位置づけることができる。

■note 記事のビュー数、いいね数

note 記事の執筆は、参加者が「つたえる」役割を実践的に経験する機会となった。受託者は、執筆に伴走しながら、参加者が伝えたい内容と伝え方を意識できるよう支援したと述べている。閲覧数や反応数といった数値は、現時点では成果を評価するための主指標というより、参加者自身が「外部に届いた感覚」を得るための補助的な材料として位置づけるのが適切である。これらの数値が最終回等で簡易的に共有されれば、役割理解と外部波及を結びつける実感が生まれやすくなると考えられる。

【コメント】

市民アートコーディネーターとしての役割理解が一義的に定まらないことは、本事業の課題であると同時に、本年度が主として第一段階（場づくり）に位置していることを示す成果でもある。だれもが文化芸術とつながる環境をつくるためには、役割を固定化するよりも、関わり方の多様性と「問い続ける余白」を確保することが重要であり、次年度はこの余白を保ちつつ、行動と段階を参加者自身が把握できる設計が求められる。

評価指標③：気軽に文化芸術活動に参加できる機会、きっかけが充実している

■文化芸術にふれる機会としての文化の会議の役割

アンケート上、文化芸術への関与意欲が初回から最終回まで高水準で維持されていることから、文化の会議は「参加してよい」「関わってよい」と感じられる入口として十分に機能していると評価できる。参加者インタビューでも、会議をきっかけに市内の文化芸術活動へ足を運ぶようになったという声が複数聞かれ、心理的ハードルを下げる効果が確認される。

一方で、回を重ねるにつれて、「次に何をすればよいのか」「自分はどこまで関わる存在なのか」が見えにくくなる局面も生じている。これは、気軽な入口としての成功と、その先の行動設計との間にギャップ

が存在することを示している。アンケートで外部波及（紹介意向）が後半に落ち着く傾向を示した点も、このギャップと無関係ではない。

もともと、最終回においてはビジョンボードの作成等を通じて、参加者が自らの関心や関与の方向性を具体化する機会も設けられており、本年度の範囲において提示可能な「次の一歩」は一定程度示されていたと評価できる。

【コメント】

文化の会議は、文化芸術活動への入口として十分に機能しているが、その入口を通過した後の「次の一歩」をどのように示すかが次年度の課題である。気軽さを損なわずに行動へ接続するためには、各回テーマとプログラムの整合を高め、参加者が自分の位置と次の段階を把握できる設計が必要である。

《総括コメント》

本事業を評価するにあたり、市民アートコーディネーターと専門職としてのアートコーディネーターは、役割の異なる補完関係にあるという前提を明確にしておく必要がある。市民アートコーディネーターは生活者の視点から文化芸術と人・地域を結びつける存在であり、専門的な企画や実装を担うプロのアートコーディネーターとは異なる役割原理に立っている。

その観点から、本会議の成果は、①市民が安心して集い、対話し、関係性を育む「場づくり」の段階と、②その関係性を基盤として、市民と専門職が協働し「つなげる・つくりだす」段階の二段階で整理することが妥当である。本年度は、このうち第一段階において、着実な成熟が確認できた年度であった。

アンケートの定量結果からは、関与意欲や好奇心が高水準で維持され、交流の実感の中盤で明確に高まったことが確認される。一方で、外部への波及や役割理解が後半で伸び悩む傾向も見られ、交流が成熟したがゆえに次の設計が求められる段階に入ったことが示唆される。

参加者・事務局・受託者が率直に悩みや不安を共有できる関係性が形成されたこと自体は、本事業の大きな成果である。その一方で、交流を外部波及や具体的な役割実感へどう接続するか、評価指標をどう参加者の実感に翻訳するか、ファシリテーションの共通言語とプロトコルをどう整えるかといった課題が、次年度に向けて明確になった。

本事業は、即時的な成果を求める人材育成事業というより、文化的コモンズを支える市民の基盤を長期的に育てる試みである。その意味で、本年度は「未完成であること」が否定されるべきではなく、むしろ次年度以降の設計改善に向けた論点が具体化した年度として、前向きに評価されるべきである。